ロビンソン

雨垂穿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ロビンソン

【Ｎコード】
Ｎ４４５１Ｗ

【作者名】
雨垂穿

【あらすじ】
流されて生きてきた少年は、未来へと進むことをためらっていた。
不安。迷い。様々なものが邪魔をする。
でも、未来はスグそこに来てる。
背中をそっと押すのは、幼なじみ。
古い、歌。
未来へと踏み出した少年は、ある決意をする。

（前書き）

エセ作家としての、二作目です。
短編を書くのは久しぶりなので結構緊張してたり（笑）
このお話の主人公には結構思い入れがあります。
このお話のもとになった歌にも。
僕よりも若い子たちは知らないかもだけど。
これを呼んで、少しでも興味をもったらぜひ聞いてみてください。
明日への勇気が、ちょっとだけ出るかもです。

少しだけ、余談を。
このお話はものすごく短時間で書きました。
僕はなかなかにいそがしいのでいつも時間が取れなくて困ってます。
お話を書くのはそんな僕の数少ない心休まる行為でもあるのです。
皆様に少しだけでもココロの羽休めをしていただけたら、幸いです。
それでは、お楽しみ下さい。

夢見がちな男の子。
僕を評するのは、その言葉で充分だった。

もういくつ寝るとー、なつやすみー、っていう歌をそろそろ歌ってもいい頃。
高校三階の、窓際。夏の日差しに照らされて、うっすらと汗をかきながら、俺は一枚の紙を見てた。
進路希望。
その四文字だけが印刷された投げやりなその白い紙は、俺の瞳から脳に至るまでに「死刑宣告」に変換されてた。
いや、まだ「最終警告」かな。
どちらでもいいけど、その紙が訴えてるのはたった一つ。
「お前、そろそろ大人になれよ」
この一言だ。

思えば、俺は進路希望なるものを真面目に書いてこなかったと思う。
初めて書いたのは小学生のとき。
両親が今時は小学生でも書くのか、と驚いてたのを覚えてる。
書いたのは父親だった。
次に書いたのは中学生の時。
なんとなく、幼なじみと友達が多く行くところにしておいた。
誰にも文句を言われなかったから、今ここにいる。
高校に入ってからも、何度か書かされたと思う。
正義のヒーローとか、魔法使いとか、結構真面目に書いてた。
だいたいの大人は、怒った。

ある時は、真面目に心配された。
今の担任は、本当になりたいんだったら別にいいと言っていた。
若い女の先生だったが、初めて肯定してくれた気がして好きになった。
でも、胸をはって「なりたい」と言えたかといえば、そうじゃない。
別に、本当になりたかったわけじゃなかったんだと思う。
今は、そう思うことにしてた。
なんか、悲しかったから。

ため息一つついて、その紙をバックに投げやりに突っ込む。クシャッとなったけど、気にしない。
一時間以上にらめっこしてたから、肩が凝った。
もんでみる。
……。
ちょっと大人な気分を味わって、気持ち悪くなった。
俺が本当になりたかったのは、ピーターパンだったのかも知れない。
大人にならない、一生子供の、みんなのヒーロー。
フック船長をやっつける。ヒロインの女の子に感謝される。
あの子の名前は何だっけ……。
ぼんやり考える脳に、直接響くような高い音が身体を叩いた。
「まだいたの？早く帰ろうよ」
ぼんやりしたまま振り返ると、幼なじみがいた。

歩く俺と、走る幼なじみ。
徒歩の俺と、自転車の幼なじみ。
それでも並んで行ける。
小学生、いや、もっと前から、同じ構図。
昼下がりの物憂げな川原には、野球をしてる元気な小学生がいた。

その姿に、昔の自分を見るような気がして、目を逸らしてしまった。
俺だって、あそこにいた。あそこにいたい。
昔みたいに、幼なじみと一緒に。
「なあ、野球しねぇ？」
「はあ？」
いきなり喋りかけたのに驚いたのか、自転車がバランスを崩す。
危なく倒れるところだったので支えてやる。
昔から危ないやつなのだ、この幼なじみは。
あ、ありがと、とどもりながら自転車を立て直す幼なじみ。
その頬が心なしか、赤い。
「おい、大丈夫かよ。なんか赤いぞ」
「え、嘘ッ！」
おいおいそんなびっくりしなくても。
ていうか。
「熱中症じゃねぇだろうな。なんか飲むか？」
元気が取り柄のコイツを苦しめるなんぞ、やるな太陽。
「え、ち、違うよ。い、いや、違わない、かな」
「どっちだよ。……自販機あるし、俺も飲みてぇからおごる」
「いいよ」
「おごる」
結局ブツブツなんかいいながらも納得した幼なじみが指定したのは、小さな黒コーヒーの缶だった。
「アンタ、まだそんなの飲んでるの？」
呆れたように、ベンチの幼なじみが声を上げる。昔から聞きなれた高い声。昔は俺の方が高かった。
「いいだろ、別に」
俺はコーヒーを飲めない。飲まない。
飲んでも、銭湯の風呂上りのコーヒー牛乳だけ。
今飲んでるのは、甘いヨービック。昔から飲むのはこれだった。

「で、何だって？」
黒コーヒーを美味しそうに飲みながら（マジかよ……）、幼なじみが聞いてくる。
忘れかけてた。
「野球しよ……」「ヤダ」
言い終わる前に即答された。まあ分かってたけど。
「アンタ、本当にもう、いい加減大人になりなよ。
アンタも私も、もう高3なんだよ？今年は受検もあるんだよ？分かってるの？」
心底呆れたように、目をちょっと吊り上げて、怒る。
これは心配してる時の怒り方だ。
それでちょっと安心する。

何にだよ。

俺は自分のこともよく分からないけど、自分よりはコイツの事を分かってると思う。
ちょっとした仕草なんかで、大体の気持ちは分かる。
例えば、今みたいな時。
ちょっときつくなる目。
ふっと落とす視線。
全部、俺を心配してくれてる。
ここまでは、いつもどおりだった。
だから、長めの髪を掻き上げるとき、ドキッとした。
その仕草の意味は、知らない。
だけど、なんか、ドキッとした。

「……進路、どうするの？」
手で髪をいじくりながら、表情の見えない幼なじみが訊いてくる。
そんなもの、俺が聞きたい。

どうしたら良いのか、分からない。
不安、なんだと思う。
今までは、何も考えずに、流されながら生きてきたから。
幼なじみに、くっついてきたから。
だから、たぶん、今までは平気だった。
だけど、本当に未来に進むんだったら大人にならなきゃだし、大人になったら、コイツとかは離れていく。
きっと、そうなんだ。だから、嫌なんだ。
「とりあえず、クルーソーと違うとこ」
そういうと、幼なじみはうつむいた。
わざわざ、昔使ってたあだ名を使ってみた。これでまた、昔と一つお別れだ。
こうして、大人になってく……、のかもれない。
この痛みも、たぶん、大人への痛み。
仲の良い幼なじみと別れることも。
「そう、ね」
幼なじみが、ふっと笑った。でも、ちょっとぎこちない。
コイツも、大人の痛みを感じてるのかもしれない。

幼なじみの缶も持って、俺はゴミ箱を探しに旅に出てた。
なんかテンションが下がってしまった幼なじみは、ベンチのところで荷物番だ。
「お、あった」
ぽつんと置かれた鉄のゴミ箱に2つ缶を投げ入れる。
カロンと、音を立てて入る。悲しげに聞こえた。
昔から、ポイ捨てというのは考えたことすらなかった。
小さな頃、一回やったきりだ。
やったとき、幼なじみがすごい悲しそうな顔をしてたから、それ以来してない。

幼なじみの悲しい顔は、怒った顔よりも苦手だった。
ふと、視線を巡らすと、先ほどの小学生たちが荷物を置いたまま消えていた。
あの年代は、よくコロコロ遊びも変わった。
なんか懐かしくなった。
落ちてたバットを振ってみる。
ブウンと、風を切る大きな音。
信じられなかった。
昔なら、木製の軽いバットだって、振るのが精一杯。音なんてしなかった。
今は、大人用の大きな金属バットだって軽々。音だって。
お礼を誰にともなくつぶやいて、幼なじみのところへ戻る。
即席のベースを踏むのが、悲しかった。
今日は、悲しい事ばっかだった。

僕は、逃げ続けてきた。
僕は、子供だった。
僕は、現実を見てこなかった。
僕は、僕は。

悲しい気分は、何やら様子のおかしい幼なじみを見て、吹っ飛んだ。
幼なじみが、絡まれてる。
他校の制服を来た、ガラの悪い連中四人に。
わお、びっくり。

思わず草陰に隠れる俺。子供は、基本怖いものが苦手なのだ。
ましてや、ちょっと大人になってしまった、大人もどきは。

「ねぇカノジョォ、遊びに行こうゼェ」

「ソォソォ、俺ら暇なのよ」
聞いてるだけで頭が痛くなりそうな甘ったるい声。
俺は、何も出来ない。
幼なじみが大変なのに、何もしない。

「お断りします」

凛とした幼なじみの声。
甘ったるい、くどい声に対抗するような、苦い、苦い、高い声。
アイツの飲んでた、黒コーヒーみたいな。
俺とか、不良みたいな、ヨービックを蹴散らすように。
俺は、恥ずかしくなった。
毛穴という毛穴から、汗が吹き出す。
涙が出てくる、気がした。
鼻をすする。
色めき立つ不良どもの怒鳴り声が聞こえた。

僕は、僕は。
俺は、俺は。
ちょっとだけ、もうちょっとだけ、大人になろうと思う。

「正義のヒーロー、見参！！」
上ずった声で名乗りを上げて、草陰から飛び出す。
きっとものすごく苦しそうな顔してる、俺。
腰が抜けそう。背を向けて逃げ出したい。
でも。
「ちょ、ちょっと」
一瞬ほうけた不良たちを尻目に、クルーソーの手を引いて反対側に駆け出す。
自転車は、ほっとく。

羽が生えたように、俺の脚は軽い。
アイツの重さなんか、気にならない。
後ろで叫ぶ不良たちなんか、もう世界の果てだ。
俺は、ちょっとだけ、大人になった。
ほんの、５秒ぐらい。充分だ。
大人初心者には、これが限界。
でも、とっても気持ちいい。
初めて、逃げることが、攻めることになった。
「俺の名前はぁ、ロビンソンだあぁ！！覚えとけぇ！！」
不良たちがぎょっとする。
幼なじみも、ぎょっとする。
それが、とっても気持ちよかった。

所変わって、俺の家。
両親は、いない。共働き。
不良の追手を振りきって、でも町内を歩くのは危険だという幼なじみの提案で、俺の所へ非難することになった。走ったせいか、ちょっと赤い顔をした幼なじみは、とぎれとぎれに提案してきた。
まさかここまで追ってくることはないと思っても、やっぱり庭とかを気にしてしまう俺は、大人初心者。
妙におとなしい幼なじみを部屋において、スイカを持っていく。
アイツの、好物。
塩をこれでもかと振り掛けて食べる。
おとなしいままの幼なじみは、ベッドに腰掛けて、うつむいてた。
スイカを置いても、反応しない。
俺は、どうしたら良いか分からない。
なんだろう、どうしてだろう。
考えろ。大人初心者。
カッコイイ大人は、こういう時、どうする？

幼なじみに、元気が無い時。

――――――昔話？

「この曲、覚えてるか？」

使い慣れたＣＤプレーヤーに、しばらく聞いてなかったＣＤを入れる。

ＣＤケース代わりにしてたのは、イギリスの冒険小説。

俺と、アイツの、あだ名の、元。

テンポよく、でもどこか哀しそうなイントロが流れて、歌詞が流れる。

二人で、よく聞いた歌。何度も口ずさんだ、歌詞。

あの歌を知ったのは、確か、

「そうそう、夏祭りだったよな。この曲初めて聞いたの」

そう、俺とコイツが知りあって、始めての、夏。夏祭りの、夜。

花火の轟音を背に、金魚すくいの屋台のラジオから、この曲が流れてた。

何度やってもダメな幼なじみのために、俺も頑張ったけど、一匹だけしか取れない。

それは、あげた。

嬉しそうな幼なじみの顔は、何年経っても色褪せない写真だ。

曲が間奏に入った時、幼なじみが、顔をあげた。

メガ。

眼が。

真っ赤だった。

気持ちがいいぐらい動揺する俺。

ゴクリと、つばを飲む。

どうした？

「……ねえ、アンタはさ……」
「は、ハイ」
それだけ言うと、また黙ってしまった。
ものすごく、気まずい。
曲は、また歌詞が始まっていた。
「……、ここ、来て……」
落とした視線を動かさずに、ベッドの横をポンポンと叩く。
「へ？」
間抜けだった。心底間抜けな声が上がった。
俺の声だった。
「いいからッ！」
ちょっといらついたように、声がする。
俺は座ってた床から腰を上げて、幼なじみの、クルーソーの隣に座る。
ちょっと間を空けたのに、いつの間にか、制服越しにアイツの体温が伝わるぐらい、近くにいた。
うつむいた幼なじみ。キョドる俺。流れる曲。
息の１つ１つ、まばたきの１つ１つすら伝わりそうな、距離。
どうやら俺の、昔話、という選択肢は間違ってたみたいだ。
俺は、幼なじみの肩を抱き寄せる。一瞬強ばったあと、寄りかかってくる。
いつの間にか、俺も、コイツも、大きくなっていた。
強かったはずの俺の幼なじみ。肩は、他の女子高生と同じように、儚げで、触ったら崩れてしまいそうになっていた。
それを、強く、強く、抱きしめる。

「怖かった」
ポツリ、と幼なじみ。
「ゴメン、隠れてた」
後悔するように、俺。

「助けてくれた」
ポツリ、と幼なじみ。
「逃げただけだよ」
ちょっと誇らしそうに、俺。
「腕」
「はい？」
「腕、男の人のやつだった。ロビンソンのやつじゃなかった」
俺は、いつの間にか、ロビンソンを卒業してたらしい。
「それを言ったら、クルーソーの肩だって」
抱きついたまんまの体制で、言う。
幼なじみの顔が、赤くなるのが分かった。
「かっこ良かった」
「……うん」
いつの間にか終わった曲がリピートされる。
二人で、口ずさむ。
終わった後、二人して笑って、離れた。
胸のあたりが、じんわりと暖かかった。

「夏祭り、今年は、出よ？」
スイカを食べながら、幼なじみが言った。
さっき俺が夏休みのことを言ったからだろう。
小さい頃こそ、何度も行った夏祭り。
参加するのは久しぶりだ。
「そう、だな」
俺の記憶より、小さな歯型をスイカに残しながら、幼なじみが微笑む。
今年の夏祭りに、一つ、目標が出来た。
「あの、さ」
「？」
「俺、進路希望出そうと思う」

「！！」
幼なじみが、肩を震わせて驚く。
「まだ、何も決まってないけどさ。でも、前に進みたいと思ったし。大人になるためにも」
驚いた幼なじみの顔が、嬉しそうに笑顔になる。
その笑顔から、目を逸らして、紙を探すけど、ない。
「あ」
バック、河川敷だ。

幸い、俺のバックも幼なじみの自転車も、河川敷にそのままあった。
夕日に照らされたそこには、何年経っても変わらない景色があった。
土手に二人で座る。回収済みのバックから、クシャッとした進路希望表を取り出す。
それは「最終警告」でも「死刑宣告」でもなかった。
「未来へのチケット」
進路希望の四文字には、そうルビが振られている気がした。
隣から覗き込もうとする幼なじみから、必死で隠しながら。
クルーソーとは違う。
幼なじみと一緒の。
「進学希望」
「未来へのチケット」には「決意」のはんこが押された。

終業式。
進路希望の紙は、その日に提出した。
若い女担任は目を丸くしてから、破顔した。
俺もなんか嬉しくなった。
二人してニコニコしてたら、幼なじみが迎えに来た。
俺は教室から担任に追い出され、幼なじみが吸い込まれた。何分

か経って、二人して笑って出てきた。
帰る時、幼なじみは嬉しそうにしてた。
なぜかは分からなかった。
なんとなく、嬉しかったけど。

「あ」
幼なじみが道端の段ボール箱を見つけた。
我輩は、で有名なアイツが中に鎮座してる。
まだ小さい。
心ないやつもいたもんだ。
「コイツ、似てる」
嫌がる子猫を、無理やりに頬ずりしながら、幼なじみが感心したように言う。
誰に、と聞くと、俺を指さす。
心外な。
俺はこんな無愛想じゃない。
嬉しそうに頬を寄せてる幼なじみを見てたら、そう反論する気にはなれなかった。

結局、俺も幼なじみも飼うことはできないということが判明して、もらってくれる人を探しに行く。
知り合いという知り合いに電話をかけて、少しでも迷ってくれた人の家には無理やり押しかけてみた。
隣町の俺の知り合いの家が色よい返事をくれて、預けに行った帰り道。
制服のままの二人は、石蹴りをして帰った。
二人で、交互に蹴る。
これがなかなか難しい。
変なところに蹴っては、大笑いしながら帰る。
夕日が、背中を照らしてた。

結んだ手も、寄り添った肩も、アイツの頬も同様に。
ちょっとだけ、頬を濃いめに。
赤く赤く、照らしてた。

結局、隣町から帰ってくるのにかなりの時間がかかって、幼なじみの家についたのは夜遅くなってからだった。
いつも別れる交差点で別れて、家に入るまでを見送る。
送り狼が出ないように。
アイツの部屋の丸い窓に明かりが灯ったのを見上げて、更にその上の雲がかかった三日月を見上げて、
「アオーン！」
吼えてみた。

俺は、旧、ロビンソン。
なんでも出来た。子供のロビンソン。
大人になる俺は、ロビンソンじゃあない。
でも、全部捨てるの？
それは悲しいよ。

夏祭りの日になった。
待ち合わせは、昔と同じ、会場の神社の鳥居。
右の柱の、下。
二人していろんな遊びをしたその柱。
１０年以上前のそこには、二人おそろいの浴衣姿の俺たちがいた。
今日。
俺は浅葱色にダンダラ染めという新選組みたいな浴衣。
アイツは、桜色の花柄の浴衣。
俺の幼なじみにはぴったりの色だ。
俺の頬もきっと、その色とおんなじ。
だって、アイツの頬もそうだから。

どちらともなく手をとって、俺たちは神社の中に入る。
喧騒は終わらない歌みたいだった。
ずっと、この時間が続けばいいのにと思ってしまう。
二人とも金魚すくいに挑戦しながら、そう考えていた。
相変わらずこの屋台だけは場違いなあの歌を垂れ流してた。
これを聞くと、あの頃に戻ったみたいだ。

そう、戻る。
俺たちは未来へ進む。
過去に生き続けるのは、思い出だけ。
それには、たまに戻ることしかできない。
だけど、それが本当は正しい。
それを、俺はあの日に理解した。

今回はどうやら俺の負けらしい。
早々に破れた紙を見つめて、捨てて。
無邪気に喜んでる幼なじみの手を引いて。
俺は、見晴らしの良い高台に登っていった。

ここまで来ると、神社の中とはいえいる人は少ない。
でも、花火を見るのはここからが最高だ。
教えてくれた友人に感謝しながら、もう一つ教えてくれたことを反芻する。
それから、あの、決意の日に出来た目標も。
両方共、ここで役に立つ。
隣、少し下を見る。
眼を輝かせながら、花火を待つアイツがいる。

あの日も、そうだった。
でも、金魚に夢中で気づいたときには終わってた。
今回はそうじゃない。

「なあ、知ってるか？」
「なあに？」
俺が言うと、小首をかしげながら不思議そうにする。
「俺は、正義のヒーローで魔法使いなんだ」
「……ハア……」
がっかりしたようなアイツ。
「だから、ここのジンクスにあやかって、一つ魔法をかける」
きょとんとしたアイツ。
どこかでピューという音がした。
一番最初の花火。
その花火は永遠の花火。
その花火が炸裂するまで、ここは俺と幼なじみだけの、誰も触れない、ふたりだけの国。
「！！」
驚き、戸惑い。
そんなのがないまぜになった顔をしたアイツ。
唇に伝わる、柔らかさ。
アイツの、暖かさ。
誰も知らない。俺だけの。
バアアン、と音を立てて弾ける。
花火が、炸裂する。
大きな音と光が、終わらない歌を振りまく。
それは俺の思いを、大きな力でソラに浮かべる。
それは、宇宙の風に乗って、雄大な未来へと旅立つ。
「……」
ゆっくりと、俺に身体を預ける幼なじみ。

余韻も去って、小規模な花火が上がり始めた会場。
俺は名残惜しさを振り切るように、そっと顔をはなした。
「付き合って、くれないか」
それだけ言うと、堰が切れたように言葉が溢れ出した。
「たぶん、ずっと前から好きだった。
でも、俺は子供だったから、自分の気持ちに、気づかないふりをしてた。
誰よりも、お前が好きだったのに。
お前が、誰よりも俺を助けてくれてたのに。
もしお前が、こんな俺でもいいのなら、付き合ってくれ」
眼を見て、支離滅裂に。
俺のかけた、半分大人の俺がかけた魔法は。
「違うよ」
ポツリと言った。
「助けてくれたのは、私じゃないよ。
助けてくれたのは、いつも、あなただった。
覚えてる？昔、私がいじめられてたのを助けてくれたのは、あなただった。
この前の時は、それを思い出して、ホントに嬉しかった。
外だけじゃない。表面だけじゃなくて、この人はずっと昔から変わらないんだって」
そういうと、ちょっと涙を拭って。
「良かったね。魔法がかかって」
そう言って。また。
腕の中に暖かさを感じる。
永遠の魔法。
「好きだよ、蓮次」
桜色の頬のさくらは、そう言って微笑んだ。

全部捨てるのは、悲しい。
だから、新しいものを拾いながら。
大事なものはとっておきながら。
前に進もうじゃないか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4451w/

ロビンソン

2011年9月6日03時24分発行